

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	小野田 澄音 (おのだ すみね)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	学部 4 年
発表年月 または事業開催年月	2026 年 3 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本発達心理学学会第 37 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	小野田澄音, 大森幹真
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	発達障害学生の大学における援助要請の特徴
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p><序論と目的> 本研究では、大学生の障害学生支援室の利用者と非利用者を対象に質問紙調査を行い、支援室利用の阻害要因および学生生活への適応要因を探索し、支援室の利用の有無によって障害学生支援室に対するイメージに差があるかを検討することを目的とした。</p> <p><方法> 参加者：大学生 52 名を対象とした。そのうち、障害学生支援室利用者が 21 名、非利用者が 31 名であった。本研究は早稲田大学倫理審査委員会の承認 (No. 2023-342) を得た上で実施し、参加者には研究の目的および内容について文書と口頭で説明を行い、同意を得た上で調査を実施した。 刺激：質問紙として、障害学生支援室イメージ尺度 (伊藤, 2006)、A-ASD (福西, 2016)、ASRS (Adler, Kessler, & Spencer, 2003)、POMS2 (Heuchert & McNair)、SDS (Zung, 1965)、GLAS (大学生生活不安尺度; 藤井, 1998) を用いた。 手続き：質問紙調査形式で実施し、参加者の募集から終結までの回答期間は 2024 年 1 月から 2025 年 6 月であった。参加者は研究説明への同意後、各尺度に回答した。回答は無記名で行われ、所要時間はおよそ 20~30 分であった。 従属変数：各質問紙の粗点および標準得点を算出し、支援室の利用の有無による群分けをもとに、分散分析を行った。また、支援室利用者を予測する要因を探索するために支援室の利用状況 (障害学生支援室利用者=1、非利用者=0) をダミー変数としてロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>【結果・考察】 障害学生支援室の利用者群と非利用者群との間で分散分析を行ったところ、項目と群に有意な交互作用効果があった [$F(3, 150)=7.743, p<.001, \text{partial } \eta^2=.186$]。単純主効果の検定を行ったところ、グループ間で有益イメージ得点 [$F(1, 50)=8.601, p=.005, \text{partial } \eta^2=.147$] と不気味イメージ得点 [$F(1, 50)=10.737, p=.002, \text{partial } \eta^2=.177$] に有意な単純主効果があった。ここから、支援室における支援内容や面談の雰囲気、相談から支援に至る過程などを可視化し、非利用者が支援室との接点を増やせる取り組みを行うことで、イメージ改善に繋がり、支援室の利用が増加することが示唆された。</p>	

※無断転載禁止